

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業
(イノベーション対話促進プログラム)
実施状況報告書

平成26年4月8日
国立大学法人岡山大学

目 次

1	当初計画の概要等	
(1)	当初設定した事業の目的	1
(2)	実施体制	1
2	業務の実施状況	
(1)	事業全体の概要	2
(2)	実施したワークショップの詳細	
	光技術と生命科学の融合への取り組み、実施検証とその問題点解決法の検討	
	1 回目のワークショップについて	4
	2 回目のワークショップについて	5
	3 回目のワークショップについて	7
	4 回目のワークショップについて	8
	5 回目のワークショップについて	10
	未来志向の対話の実施等による異分野ネットワークの構築	
	1 回目のワークショップについて	11
	2 回目のワークショップについて	13
	3 回目のワークショップについて	14
	4 回目のワークショップについて	16
	5 回目のワークショップについて	17
	6 回目のワークショップについて	19
3	事業実施により得られた知見・課題等	
(1)	本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等	22
(2)	今後の活動への展望	23
4	その他	24

1 当初計画の概要等

(1) 当初設定した事業の目的

本事業のテーマは「光技術と生命科学を異分野融合し、革新的イノベーションを社会実装する」である。岡山大学は、秀逸な光技術を有する。具体的には、本学はパテント・リザルト社が2012年に発表した「光学的分析関連技術特許総合力」が全国第1位であり、またわが国が世界に誇るSPring-8と国家基幹技術SACLAにもっとも近地の総合大学という地の利を有し、Science誌が選ぶその年に得られた画期的な10の科学成果「Breakthrough of the Year 2011」に選出される実績をも有する。一方、生命科学分野においても本学はパテント・リザルト社の「遺伝子関連技術特許総合力」において第2位である。さらに本学附属病院である岡山大学病院は、わが国に10病院しか指定されていない日本発の革新的な医薬品・医療機器の創出等を担う「臨床研究中核病院」のひとつであり、医工の異分野融合の場である医歯工学先端技術研究開発センター、産業界と本学医療系学部のイノベーション機関であるおかやまメディカルイノベーションセンターなど、生命科学分野においても秀でた組織が整備されている。

この現状に鑑み現在の挑戦は、このような各界に分散する秀逸な技術や環境、構想をさらに融合させていくべき点にある。現状、産・学・官は各々独立しており、相互が「対話」する場は少ない。「対話」の場面を作り、「気づき」を得、「イノベーション創出を共有」する視点を持つことが解への道筋だと考え、分野を超えて対話を構成し、物事に取り組むことは最適な方法と考える。気づきを得ることで問題を解決し、ひとつのものを作り上げるポジティブな未来思考を得ることが重要と考えた。

次に、事業の目標及び方法は下記に通り設定した。

- ① 光技術と生命科学の融合への取り組み、実施検証とその問題点解決法の検討
- ② 岡山大学ならびに岡山の置かれている産官学連携の現状解析と改善点の洗い出し
- ③ 未来志向の対話の実施等による異分野ネットワークの構築

各方法において、さまざまワークショップや講演会、調査などを実施し、社会実装できる最善の道筋と地域からのイノベーション創出の可能性を導き出すこととした。

(2) 実施体制

事業実施責任者は、岡山大学学長特命（研究担当）・リサーチアドミニストレーター（URA）の佐藤法仁が担った。同氏は、本事業の計画立案、申請を統括しており、また岡山大学URA主催のフューチャーセッション（Future Session）のファシリテーターをはじめ豊富な職務を経験しているため事業実施責任者として適任であった。なお、URAは学長直属の組織であり、研究担当理事・副学長とともに本学の研究運営に深く携わっており、責任者として最適である点も事業実施責任者としての理由である。

①③事業担当者は、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授の狩野光伸が担った。同氏は、医工薬連携研究、医薬教育と臨床（医師）経験を有し、また、国内外の各種学術領域や関係企業、行政関係との連携を多く有している。数多くの学術集会やワークショップの主催経験も有しており、①③事業に精通かつ、豊富な人脈を持っているため事業担当者として適任であった。

②事業担当は、本学の産官学連携の中核を担う産学官連携本部長・教授である大原晃洋が担った。同氏は、中央ならびに地域産業界と太いパイプを有し、本学の産官学事業を統括しているため、②事業担当者として適任であった。

なお、事務的な面は本学の事務局が担当し、運営等の実施支援は、ノウハウを有する岡山大学研究推進産学官連携機構（機構長：研究担当理事・副学長）が当たった。

2 業務の実施状況

(1) 事業全体の概要

前述した通り、本事業は3つからなり、全体を通じてワークショップ等を開催し、最終的に、①光技術と生命科学の融合への取り組み、実施検証とその問題点解決法の検討、②岡山大学ならびに岡山の置かれている産官学連携の現状解析と改善点の洗い出し、③未来志向の対話の実施等による異分野ネットワークの構築などを実施した。

① 光技術と生命科学の融合への取り組み、実施検証とその問題点解決法の検討について

本取り組みについては、ワークショップを5回開催した。少人数から100名規模のワークショップをコンスタントに行うことで、学内に対しては岡山大学が光技術分野に強みがあることを認識させる宣伝となった。また、そこからもともと「生命科学分野が強い」という、持ち合わせていた認識を融合するためには、いきなり融合させたワークショップを開催するのではなく、「互いの紹介」という入りやすいテーマを持ち込んで実施した。そのため主催者側としては労力が必要ではあったが、5回という回数分のワークショップを開催し、少しずつ融合を図ることとした。具体的にはファシリテーターの力量によるところが強く、光技術、生命科学の両分野の学術的・産業的・社会的な知見を有することが条件となり、この知見を駆使することで、ワークショップの参加者らが互いの知らない部分を知る導入となった。また、両分野ともに、国際競争が非常に激しい分野でもあり、国内ネットワークだけでは今後の戦略を構築できないことは、誰もが認識していた。そのため、国内で類似した取り組みを行っている機関との連携したワークショップや国内外の市場調査、研究機関視察、展示会やシンポジウム参加など、多様な活動を実施し、国内情勢の把握に努めた。その結果をもとに国際的な動向を探るための調査と今後のイノベーション創出のための連携を模索するワークショップを実施し、新たな共同研究などの創出の成果などを得た。

② 岡山大学ならびに岡山の置かれている産官学連携の現状解析と改善点の洗い出し

本取り組みについて、岡山大学では今まで実施されて来た産官学連携の取り組みについて、総括ならびに検討を行ったことがなく、弱点解析や改善策の検討などは実施されていない。そのため、連携機関と共同で、比較機関を設定のうえ、それらの聞き取り調査を含めての産官学連携の現状解析と改善点を洗い出を実施した。

具体的内容としては、次の通りである。

調査のゴールは、「主要大学における、情報発信の現状とその把握」、「産学連携に向けた有効な情報発信手段の理解」、「岡山大学における、理想的な情報発信のあり方、仕組み、追求すべき効果の理解」などである。

調査の結果、対企業向けでは大企業、中堅企業、中小企業という階層を分けた情報発信が重要である点、コンテンツには強みと弱み（他と比較した際の優位性）を把握し的確に発信する点、地方大学における首都圏での大規模イベントの開催への注力している点、コーディネーターの経験値に応じた連携の良し悪しがある点、岡山大学は他大学と比較して産学連携のスタッフ数が少なく、負担が極めて大きい点がデータとしてはじめて把握することができた。

また本調査の結果のひとつである、人員構成において負荷が多い点がデータとし

てはじめて把握できたため、人員増強へのエビデンスができ、産学官連携スタッフの増員へ結びついた点、本調査から得られた利点を都市部での大規模イベント（nano tech 2014）において実施することで「ビジネスマッチング賞」を受賞したことなどへの成果へとつながった。

③ 未来志向の対話の実施等による異分野ネットワークの構築

本取り組みについては、ワークショップを6回開催した。具体的には、岡山大学・岡山県を含む地域で古くから研究が行われてきた鉄研究、そして研究広報や科学技術政策と言った研究を支える分野である。

鉄研究などは、岡山大学だけではなく、岡山県周辺地域においても、いままでバラバラに研究されてきたことが事前のファシテーター会議で明らかになっており、この顔合わせと融合を模索できる対話の場を設けることとした。対話の中では、同じことで悩んでいた、同じ方向性を持っていたり、また光技術分野や産業界への応用など、いままで「イノベーション創出」という思考がなかったものに、それらを付加するきっかけを与える良い機会となった。

また、文部科学省などから科学技術政策の担当者やコンサルティング、マスコミ関係の広報専門家らに対話材料の提供者として招聘することで、より具体的に異分野融合を政策や社会還元に関結する動機づけを行うことができた。

なお、これらの構築には、他機関で開催されている対話型ワークショップ（イノベーション対話ツール開発事業への参加を含む）やシンポジウム、展示会などへの参加による対話方法や情報収集を当該ワークショップに随時活かすことで、より良い構築につなげた。

なお、本事業の学内外の情報発信は、下記の通り実施した。

- ・ワークショップ開催の告知は、主に岡山大学ホームページ「イベント欄」や新聞広告で実施した。
- ・ワークショップ開催の報告は、岡山大学ホームページ「新着ニュース」で掲載後、株式会社文教ニュース社を通じて、「週刊 文教ニュース」へ順次掲載した。
なお告知、報告双方ともに、文部科学省の大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業（イノベーション対話促進プログラム）の一環で実施された旨の文言を入れた（ただし、文教ニュースでは記事スペースの制限から割愛されているものもあった）。
- ・本事業の報告を広く発信させるため、専用ブログを開設した。平成25年8月16日のブログ開設以来、事業終了の平成26年3月末までの7ヵ月間に、2,700アクセスを超える訪問を記録した。

ブログのURL：<http://okayama-univ-ura-sn2013.blogspot.jp/>

(2) 実施したワークショップの詳細

①光技術と生命科学の融合への取り組み、実施検証とその問題点解決法の検討

第1回

<ワークショップの概要>

テーマ：光で生命科学の次世代研究シーズ・ニーズを探る フューチャーセッション in 浜松

目的：光技術と生命科学の両分野において、同様の取り組みを行っている機関を訪問し、情報収集を主とした対話型ワークショップを実施する。

仮説・狙い：情報共有による、国内における研究競争力の分析と国際的な弱みを把握できるのではないかと考えた。また今後の連携も模索できるのではないかと考えた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

(定めた題目の未来について多様な立場から解決すべき問題を提起し、少人数で活発な対話を通してより良い未来を実現する解決案、または次につながる案を構築するセッションのこと。事前登録と参加費不要とし、誰でも議論に自由に参加し、また途中で自由に抜けられる縛りのないセッションであり、ファシリテーターが将来につながる提案が導き出せるようにある程度方向性を決めて対話を進める。また出入口は会場1か所、かつファシリテーターから見える場所に設定し、ファシリテーターが途中参加者を把握できる会場設定としている。岡山大学が従来から行って来た方法で、異分野連携などの場で実績を残している)

参加者の状況：前述の手法で述べた通り、事前登録不要で誰もが途中参加・途中退場できる形式である。人数把握は、配布資料の残数での把握、参加者の属性はファシリテーターがセッション前に聞いている。今回の参加者は約50人であり、企業人が約10人、医療従事者が約20人、学生が約10人、教員が約10人といった状況であった。

会場：浜松医科大学医学部附属病院（静岡県浜松市東区）



対話材料の提案を行う参加者

スケジュール：平成25年10月9日 16:30～18:00

ファシリテーター：平川聡史（浜松医科大学）、佐藤法仁（岡山大学）

双方にファシリテーターを立てることで事前連携を密にした。また平川氏は准教授かつ医師であり、生命科学分野に広い知

見を有している。また佐藤法仁は、生命科学分野と産業界を双方の見識を有しているため、ファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：事前協議を重ねていたため特に問題なくファシリテーションを実施した。これは、両ファシリテーターが医療と企業の見識を持ちえていたためだと考える。

課題としては、参加者（特に学生）らからの質問で「略語」の問い合わせが来た点であった。無意識のうちに略語を口にしていたため、一部の参加者らの理解が遅れた点があった。

<ワークショップの検証とアウトプット>

目的と仮説ならびに狙いは成功した。つまり、光技術分野と生命科学分野の融合は研究面ではうまく行くことが、こと企業との連携となると大学等のアカデミアの思考とビジネスの思考がうまくかみ合わない点があることが把握できた。これは、特に医師がからむ生命科学分野では、ビジネス的な視点を学ぶ機会が皆無であり、仮に身に付けたとしても、それは国際ビジネスの場に耐えうるものではないという点であった。これは、本ワークショップに企業人が参加していたことでより明確な課題となった。この着眼点は実際に対話することで、現実の問題として参加者が把握することができたよい点であった。

本ワークショップは、特に医師と企業人が対話するという場面を設定できたことは良かった。参加した企業人からは今後もワークショップへの参加の希望があり、継続性へもつながった。改善点として、参加者らからは「やはり地理的に浜松と岡山は距離があり、この不景気では岡山までシーズを探しに行けない」という意見や「国際的な弱みである医師と企業人の連携という点を克服するためには、医師養成の根幹の改革も必要である」と言った参加者の意見があり、これはワークショップ内だけでは解決できない点であった。

これらをファシリテーターらが行きとめを行い、特に光技術分野の生命科学応用の市場調査分析に活かすように行きとめを行った。また次回として、今回の参加者らを交えた、より具体的なワークショップを開催することとした。

第2回

<ワークショップの概要>

テーマ：テラヘルツ光と生命科学融合による革新的イノベーションワークショップ

目的：第1回のワークショップをもとに、よりイノベーション創出の具体的な対話とイメージ把握を掴むための対話型ワークショップを実施する。

仮説・狙い：特定、つまり岡山大学の強みである光技術分野と生命科学分野にポイントを絞ることで、今後の具体的なイノベーション創出への道筋が浮かんで来るのではないかと考えた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は約80人。

(企業人約30人、医療従事者約20人、学生が約10人、教員約10人、事務職員約10人)

会場：岡山大学津島キャンパス（岡山県岡山市北区）



対話する参加者ら

スケジュール：平成 25 年 12 月 5 日 13:00～17:00、6 日 9:10～11:25

ファシリテーター：佐藤法仁、狩野光伸（岡山大学）

両名とも前回の浜松でのワークショップに参加しており、かつその時から事前協議を重ねていた。佐藤法仁が企業的視点を、狩野光伸が生命科学的視点で方向性を定めて対話を進めるように分担できていたため、両人がファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：事前協議を重ねていたため特にワークショップ自体は問題なくファシリテーションを実施した。これも第 1 回目と同様に、両ファシリテーターが医療と企業の見識を持ち得ていたためだと推測される。また前回の課題として挙げた「略語」は使用しないように注意した。課題としては、対話中に非常に具体的な案が出た時、つまり企業から新たな製品開発というイノベーション創出としては非常にありがたい点であったが、他の参加者からは、そのイノベーティブさが理解できない点もあり、対話の島ごとに温度差が出てしまった感があった。

<ワークショップの検証とアウトプット>

目的と仮説ならびに狙いは成功した。つまり、対話により具体的な製品開発の案が創出され、研究実施の詳細をつめる話し合いがなされた。これはイノベーション創出への足掛かりとなる良い点であり、本事業としても喜ばしいことである。ただ、本事業の運用とも関係することだが、具体的な案がうまれた時点で、そこには「秘匿性」がうまれるため、以後の対話はいずれもうまれにくいという点が問題としてあった。

他方、より具体性を求めると、やはりグローバルな視点がどうしても絡んでくるため、参加者らからは「海外の動向を知りたい」、「参加者にその分野の知見に明るい話題提供者か参加者を配置してほしい」という意見が数多く寄せられた。この点から、ファシリテーターらの国際的な情報収集などを行い、それを日本でのワークショップにフィードバックすることが重要だと感じた。これらを踏まえ、このワークショップの参加者らの人的にネットワークを駆使し、光技術分野で世界的に強い研究機関を選定し、かつ情報収集へ赴くこととした。

第3回

<ワークショップの概要>

テーマ：革新的光技術で次世代グローバル研究シーズ・ニーズを探る

目的：第2回のワークショップにおいて海外動向を求める参加者の声が多かったため、ファシリテーターらが世界的に第一線の光技術分野と異分野連携を有するカナダのケベック先端科学技術大学院大学を訪問し、情報収集を行ったため、そのフィードバックのために対話型ワークショップを実施し、国際動向を参加者らに掴んでもらうことを目的とした。

仮説・狙い：海外動向を知ることによって光技術分野と生命科学分野のイノベーション戦略の基礎を考案できるのではないかと考えた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は約40人。

(企業人約5人、学生が約20人、教員約10人、事務職員約5人)

会場：岡山大学津島キャンパス（岡山県岡山市北区）



参加者ら（一部）

スケジュール：平成26年1月23日 15:30～16:30

ファシリテーター：佐藤法仁、紀和利彦（岡山大学）

事前にファシリテーターが協議し、佐藤法仁が生命科学的視点を、紀和利彦が光技術的視点で方向性を定めて対話を進めるようにし、目的を達成できるようにした。また、両名は事前にカナダ視察を行っており、今回のファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：事前協議を重ねていたため特に進行自体は問題なくファシリテーションを実施した。これも前回同様に両ファシリテーターが各々の見識を持ち得ていたためだと推測される。ただ具体的なイノベーション創出を話し合う場として設定したが、学生の参加が多く、まだ学問を学ぶ段階の学生の中には「イノベーション創出」という点に発想がなかなか追いつかず、思った意見が出せなかったように感じられる点があったのは課題であった。

<ワークショップの検証とアウトプット>

このワークショップは反省すべき点が多かった。海外視察を受けて、国際社会での光技術と異分野連携の状況を把握できたことは非常によかった。しかし、視察先の受け入れ研究者が急遽来日する情報を得、本学まで足を運んで頂き、対話材料の提供を行って頂くことで、より生の声を聞いての対話ができるかと狙っていた。しかし、スケジュールが急であったため、ワークショップ開催の告知期間が短く、かつ企業や医療従事者は事前に時間を確保することができず、参加者が少ない中での開催となってしまった。そのため、生命科学的な対話が少なくなってしまう、光技術分野のイノベーション創出の対話を中心となった。

参加者らが光技術分野の知見を有する人が多かったため、「海外の第一線的话题を聞き、対話できたのは非常に有益であった」との感想が多く、より具体的なイノベーション創出に結び付く共同研究の話が持ち上がり、海外視察先であるケベック先端科学技術大学院大学で対話を行うということが決まった(3月22~25日にケベック先端科学技術大学院大学を再度視察し、イノベーション創出対話材料を入手してきた。視察報告をもとに、かつ今回の反省点を踏まえた対話会を5月中に岡山大学の自主経費で開催する予定である)。

フィードバック会では、海外視察などを経て具体的な光技術分野のイノベーション創出に向けた種がうまれていることを確認したが、「光技術分野と異分野連携」という面が強く、「光技術分野と生命科学分野」という本来に融合からは少しずれて来ている問題点があがった。そのため次回は、生命科学分野から光技術を利用するという視点でのワークショップを開催することとした。

第4回

<ワークショップの概要>

テーマ：放射光科学と創薬科学融合による革新的イノベーション創出ワークショップ

目的：第3回のワークショップにおいて、光技術側に重点が置かれている反省点から、生命科学分野にシフトを戻すことを念頭においた。連携機関との共催により、生命科学系の関係者が世界最高レベルの光技術に触れること。またファシリテーターが海外視察において収集してきた情報をワークショップに還元し対話することで、国際的な視点に立ったイノベーション創出の種を見つけることとした。

仮説・狙い：わが国が世界に誇る世界最高の大型光技術施設「SPring-8/SACLA」は電化製品や食品開発など、あらゆる研究開発に役立てられているが、こと生命科学分野においては、研究者自身が当該施設をあまり知らないという結果が事前調査によってわかっていた。今回のその概要に触れることで、光技術分野を利用した生命科学のイノベーション創出の新たな基礎を考案できるのではないかと考えた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は約30人。

(企業人約10人、学生が約5人、医療従事者約15人、教員約5名、事務職員2人)

会場：独立行政法人理化学研究所播磨事業所(兵庫県佐用郡佐用町)、岡山大学津島キャンパス(岡山県岡山市北区)



参加者ら（一部）



ワークショップでの対話成果を述べる参加者

スケジュール：平成 26 年 2 月 21 日 13:00～22:30

ファシリテーター：佐藤法仁（岡山大学）

ファシリテーターを務める佐藤法仁は、以前から（独）理化学研究所播磨事業所と人的ネットワークを有し、施設概要を熟知していること、生命科学分野の研究と企業経験を有し、また海外視察の当事者でもあるため、今回のファシリテーターとして対話を進め、目的を達成できるための適任と考えた。

ファシリテーションの実施状況：深い知識を有し、視察施設を熟知していたため、ワークショップの進行は問題なく実施できた。ただ、今回は施設見学、海外事例の紹介、対話、まとめと盛りだくさんであったため、どうしても長時間の対話となってしまった。参加者からは「こまめな休憩を」という意見と「対話がまとまりかけている際の休憩は不要では」との相反する意見を受けた。対話の落としどころを見極めたファシリテーションが必要だったと感じた。

<ワークショップの検証とアウトプット>

前述したように長時間に及ぶワークショップであったため、参加者の疲労は大きかった。対話材料の分量を見極めたワークショップの実施が必要だった点は反省すべき点だった。

目的の達成については、創薬に絞ったことから、わが国から新たな創薬イノベーションを創出できる非常に大きな種となった。またこれは海外視察において、国外メガ・ファーマから独自ルートで得たメガ・ファーマの弱点、つまり光技術を用いた結晶構造の解析が不得意であるという点に起因する。これら海外視察、光技術分野の現場視察、そして専門的な対話という着眼点がうまく合致したワークショップであった。

参加者らからは、専門的対話に絞り、具体的なイノベーション創出を狙ったことに対して、体力は使うが具体的な思考を得ることができたと好評であった。

フィードバック会では、今回は最終回とし、総括を行う場とすることとし、また文部科学省から政策に携わっている方を招聘することで、政策的な視点を盛り込んだ総括とすることとした。

<ワークショップの概要>

テーマ：放射光科学による革新的イノベーションワークショップ

目的：光技術分野の総括として、これまでに取り組みや、同じような取り組みをしている機関の紹介を行う。また、政策に携わる方からの総括を受けることで、当該分野の今後の方向性を考える場とした。

仮説・狙い：総括を行うことで、そこで出た総合的な点を洗い出し、次年度以降の施策立案に活かせるのではないかと考えた。

手法：総括のため自由な意見交換とした

参加者の状況：参加者は約 40 人。

(企業人約 10 人、学生が約 10 人、医療従事者約 5 人、教員約 15 名、事務職員 2 人)

会場：岡山大学津島キャンパス（岡山県岡山市北区）



岡山大学での研究とイノベーション創出の方向性について対話材料を提供する岡山大学研究担当理事・副学長



総括を行う文部科学省の光技術分野の担当者

スケジュール：平成 26 年 3 月 14 日 12:30～17:50

ファシリテーター：佐藤法仁（岡山大学）

ファシリテーターを務める佐藤法仁は、本事業の実施者責任者であり、全体を通じてのファシリテーターを行ったため、本総括でも適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：今回は総括であったため、これまでの取り組みの紹介後に、参加者らとともに自由な意見交換を行うという方式にした。そのため、ファシリテーターが音頭をとることはせず、参加者らの中で参加していなかった、各ワークショップの紹介や成果について紹介する程度の関わりとした。参加者らは、光技術分野と生命科学分野の融合という、いままで知り得なかった分野を知ること、そもそも岡山大学がその分野で強みを有していることを知らずにいたことなど、様々な意見が出た。また参加者に理事（研究担当）・副学長がいたため、岡山大学が平成 25 年 8 月に文部科学省から選定された「研究大学強化促進事業」での当該分野の運用や産学官連携の戦略を考える場ともなった。また、総括を頂いた文部科学省の方からは、誰のための研究・企業活動であるのかを

より明確にして、イノベーション創出を練ることで具体性が生まれやすいのではないかとアドバイスを頂いた。

<ワークショップの検証とアウトプット>

前述したように今回は、当該分野の総括であるため、自由な意見交換の場としてワークショップを設定した。そのため、自由な意見がさまざま出た点は狙い通りであった。しかし意見を集約し、これを組織の今後の施策に反映させるのはよく用いられることであり、問題はないが、これを個々人に落とし込むという方法を明確にしていなかった点は反省すべき点だった。しかし、個々人に落とし込んだからと言って、それをどうやって把握するのか、またはイノベーション創出へと結びつけるのかという手法の確立は、別検討で議論する必要があると感じた。

③未来志向の対話の実施等による異分野ネットワークの構築

第1回

<ワークショップの概要>

テーマ：研究広報戦略ワークショップ

目的：企業で戦略的に行われている広報戦略活動を紹介することで、その異分野の取り組みを研究広報に活かすこと、また企業広報との異分野ネットワークを構築するための第一歩とする対話型ワークショップを実施する。

仮説・狙い：研究広報に関する対話型ワークショップと言うもの自体が見かけないため、企業活動でのノウハウを紹介すること自体が新しい知見を得れる第一歩となるのではないかと考えた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は約80人。

(企業人約20人、学生が約10人、医療従事者約10人、教員約30名、事務職員約10人)

会場：岡山大学津島キャンパス（岡山県岡山市北区）



対話する参加者ら

(対話が白熱すると人は自然に立ち上がるのか?)

スケジュール：平成26年2月22日 13:00~17:00

ファシリテーター：江草明彦（テレビせとうち株式会社）

ファシリテーターを務める江草氏は、広報などマスコミ関係のスペシャリストであり、企業の広報活動を熟知している。

また報道に長くいるため、物事をわかりやすく伝える秀逸な能力を有するため本ワークショップのファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：対話材料の提供者の多くが企業人であったことから、同じ分野のファシリテーターの進行には何ら問題なく進んだ。また研究者など、アカデミア側からの質問や対話のとりまとめについても、事前に本事業責任者や本学関係者らと協議していたため、問題なく進められた。参加者らからは、「企業広報を研究広報に応用できる点がある」、「当たり前用語が、異分野では当たり前ではなく、それがコミュニケーションの断絶だけではなく、時として問題として表面化することもある」などの対話になされた。全国的にみても非常に珍しいワークショップであるため、参加者ら対話が弾み、また会場にテレビ局の取材が来ていたこともあるためか、それが刺激となり、非常に白熱した対話となった。

<ワークショップの検証とアウトプット>

前述したように非常に白熱した対話が行われ、かつ知らない分野への興味がわきたつ内容であったため、目的である異分野ネットワークを構築するための第一歩とするという狙いは的中した。具体的なネットワークとしては、強みある企業広報担当者との人的連携などが挙げられる。大学側は、本ワークショップにおいて知らないことが目白押しであり、得られる知見は多大であった。また、企業側においては、新ビジネスの市場としてアカデミアを見ることができるという、相互の利害が一致したために、対話から具体的なネットワークがうまれたのではないかと推測される。着眼点は最適であった。

参加者らから多かった意見は、「広報から得られるチャンスがある」というものであった。つまり、研究活動は、論文や書籍にすることだけが最終目的ではなく、社会実装などを視野に入れて活動することが重要であること。その過程において「広報」は、自身の研究を社会に広めることで、同・異分野、企業連携などの窓口となるチャンスを得ることのできる良い手段のひとつだという点が多かった。

他方、国際広報と国内広報では、そのやり方やネットワークには違いがあるのではないという点が浮き彫りになった。また、文系・理系と区別する日本的な学問文化において、それぞれの区別をなくすことは難しく、かつそれぞれの区分での広報のあり方をおこなう必要があるという意見が出た。今回のワークショップでは国内と国際、文系と理系という区分を設けてなかったため、対話が広がり過ぎた点があった。そのため、次回は絞った分野、つまり本事業の取り組みのひとつである光技術に焦点をあててワークショップを開催することとした。

第2回

<ワークショップの概要>

テーマ：研究広報戦略ワークショップ II

目的：前回の第1回研究広報戦略ワークショップにおいて、分野を絞った場合から洗い出される研究広報戦略について把握する。

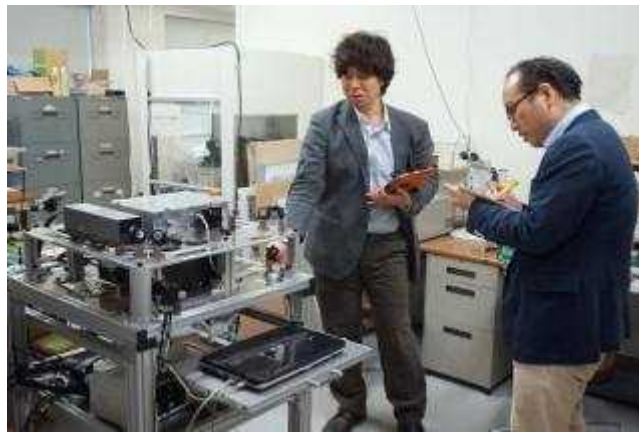
仮説・狙い：研究者と広報専門家（今回は記者を設定）の対話を核にし、集中的に対話することで、効率的に問題点を洗い出されるのではないかと。また、対話から洗い出された内容を、「共同作業」で改善を実施することで、相互の気づきから、理解と人的ネットワークが生まれてくるのではないかと仮説し、これがうまく行けば他分野にも応用できると狙った。

手法：記者と研究者が研究材料について対話を行う。対話の場は実際の研究現場を見て、触れて、感じて行う。互いの対話からすれ違いを言葉で洗い出す。その相違を補完するために、社会に分かりやすい記事にするためにはどうしたら良いかを対話を通じて構築する。実際に記事にして、達成感を実感させる。

参加者の状況：参加者は7人。

（企業人1人、学生1人、教員4人、事務職員1人）

会場：岡山大学津島キャンパス（岡山県岡山市北区）



実際の研究現場で対話し、伝えたいことを互いに言葉にしていく参加者ら

スケジュール：平成26年3月4日 9:00～16:30

ファシリテーター：佐藤法仁（岡山大学）

第1回ワークショップの参加者であり、かつ岡山大学の研究広報の中核を務めているため、本ワークショップのファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：はじめての試みであるファシリテーションであったが、事前協議を重ね、またファシリテーターが関係者と直に会い、事前対話を密に進めていたため、問題なく実施された。特にファシリテーターが各分野の知識を事前に蓄え、対話者らが行き詰まりを感じないように補正した点がうまく行った点と考える。課題としては、開催時間が長時間のため、参加者らの体力や集中力を把握しなければならないという点であった。この点、非常に難しく課題が残った。

<ワークショップの検証とアウトプット>

本ワークショップは、対話者が互いを理解し、記事を作成するに至るという方法は実践的であり、いままでにない着眼点であったため、この成功事例を他分野に応用できる効果があると考えられる。課題としては、このスタイルは相互理解と共同作業

(記事を作る) を経るといふ点から長時間を要するため、体力の消耗が非常に激しい。今回はファシリテーションの試験運用という面を考慮し、敢えて限られた人数で実施したが、これを大人数に拡大することは不可能ではないかと現時点では判断している。その点で、「効果はあれど普及性のないワークショップ」ではないかと言える。これらの点を踏まえて、課題を解決するための協議を今後も重ね、岡山大学が本年度より設置する広報戦略本部(仮)でのOJTや特定分野での研究広報戦略に活かしていくこととなった。

なお、今回の取り組みである「記事化」は完了しており、新聞に掲載済である。

第3回

<ワークショップの概要>

テーマ：鉄研究の異分野融合による革新的イノベーションワークショップ

目的：岡山大学・岡山県を含む地域で古くから研究が行われてきた鉄分野の研究があるが、実際には各学部や研究室が各々実施している面がある。これは学部や研究科の違いによるものだが、ターゲットは同じ「鉄」としている。この点から、当該分野の異分野ネットワークの構築を目指すことを目的と、異分野融合の成功事例作成を目的とした。

仮説・狙い：ターゲットが同じ「鉄」であるため、異分野ネットワークがスムーズに構築できるのではないかと仮説できた点と、研究広報戦略ワークショップで培った、異分野を相互理解するという着眼点をこの鉄分野で実践する狙いがあり、これがうまく行けば、以後にワークショップを計画している岡山大学の強みである生命科学分野においてもスムーズに異分野ネットワークが構築できるのではないかと考えた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は約100人。

(企業人約20人、学生が約10人、教員約20人、医療従事者約20人、事務職員約20人、一般約10人)

会場：岡山大学津島キャンパス(岡山県岡山市北区)



参加者ら(一部)



対話する参加者ら

スケジュール：平成26年3月15日 13:00~18:30

ファシリテーター：佐藤法仁、大原利章(岡山大学)

テーマを「鉄」に絞ってはいるが、領域が産学官と他分野に渡るため、ワークショップの効率的運用を考慮し、2人のフ

ファシリテーターを設置した。また、話題提供の半数が生命科学分野であるため医師がファシリテーターを務めるのは効果的と判断した。佐藤法仁は、研究広報戦略ワークショップのファシリテーターであったため、培った知識と技術を大原利章と共有するための事前協議を重ね、異分野ネットワークの効果的な構築に努めるようにした。これらの点から両名がファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：仮説通り、同じテーマを扱っているため、対話材料を受け入れるのはスムーズに進んだ。「自分の分野に活かさないか」という姿勢が目に見えて感じることができた。異分野連携を構築するための第一歩としては、効果があった。また、研究広報戦略ワークショップで培った、「相手に分かりやすく話す」ということを何よりも重点においたことは、口にする言葉の吟味を深めるとともに、相手を理解しようとする姿勢が増した効果があったのではないかと推測される。課題としては、姿勢が強い対話の島に一般人の方がいる場合、置いてきぼり感があったように感じた。今回の参加人数が多かったため、2人のファシリテーター以外に、全体をサポートする、ある程度専門能力を有する人員を対話の島に配置しておくべきだったことが課題であった。

<ワークショップの検証とアウトプット>

本ワークショップの着眼点は狙い通りであり、鉄を核に生命科学分野の共同研究などの異分野ネットワークのアイデアとコンセプトがうまれた。うまれたコンセプトのうち、岡山大学に関連する研究分野は今後のワークショップで、その展開を見守るとし、また「なんとなく、ぼやーっとした」点に関しては、まずは人のつながりを引き続き持つこと、そのための場を岡山大学が提供することとした。

フィードバック会では、今回の異分野ネットワークの成功事例は、同じテーマをターゲットにしているため、異分野連携がしやすいという利点があるが、もしかすると「真にイノベーション創出」につながるものは、テーマ自体が異なり、かつ他分野である、一種のカオスのような混在から生まれ出るのかもしれないという対話を中心となった。これは、参加者らの意見の多くが「自分と同じテーマなので対話しやすかった」という意見が数多く認められたため、この満点感想の裏側にある本音が何かあるのではないかと思案したことによる。本事業機関内では結論には至らなかったが、現在も継続して検討しており、本年度中になにがしらのワークショップを開催して検証したいと考えている。

第4回

<ワークショップの概要>

テーマ：岡山メディカル・イノベーション

目的：岡山大学の強みである生命科学分野、厚生労働省指定の「臨床研究中核病院」である岡山大学病院など、こと当該分野におけるシーズ・ニーズは豊富であるが、これを実社会、特に産官学連携に繋げ、新たなイノベーション創出を模索する総合的な対話会を行い、現場の声に即したイノベーション

ン創出を目指すことを目的とした。

仮説・狙い：生命科学分野、特に医療分野は「仕切りが高い」という面があることは事前調査で把握していた。そこで、「病院の敷地内」で対話会を開催することで、自然と医療従事者と企業人、研究者らが出会える場をつくり、今まで出会えなかった知見と人的ネットワークから、イノベーション創出へとつながることを狙いとした。また、より多くの方々に参加してもらうため、サイエンス・トークや知的財産対話会、企業紹介、製品紹介展示など、「医療展示会」をベースとした総合的な対話会とした。

手 法：前述の通り、展示会をベースに人を集め、そこで対話することを第一とした。次に出展者や医療従事者の生の声を聞き、対話する「岡山大学病院の医療現場からの開発ニーズ対話会」を実施し、医療受持者と企業、研究者、一般の方の垣根を下げるとともに、対話を行うことでイノベーション創出につなげる。

参加者の状況：参加者は約 360 人。

参加者の属性は不明。会場入り口で配布したパンフレットの数より参加者数を把握した。

なお、「岡山大学病院の医療現場からの開発ニーズ対話会」の参加者は約 60 人（企業人約 20 人、教員約 10 人、医療従事者約 30 人）

会 場：岡山大学病院（岡山県岡山市北区）



医療従事者が開発した医療機器を参加者に実演を交えて説明し、事業化を探る



岡山大学病院の医療現場からの開発ニーズを発表する関係者

スケジュール：平成 26 年 3 月 18～20 日 13:00～20:00

ファシリテーター：佐藤法仁、大原晃洋（岡山大学）

ファシリテーターを 2 人配置した。産学官連携の実務と広い知見を有す岡山大学の産学官連携本部長を務める大原晃洋と、生命科学分野（医療分野含む）に産業化を含めた知見を有す佐藤法仁である。それぞれ、本展示会の発案・企画・運営者であることから、密な連携をとっており、ファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：紹介、対話のみに絞りを設けた。つまり、今回

の展示会での対話会は事業化に直結できるか、できないか、という非常に明確なラインが存在している。そのため、限られた時間で企業視点から見て、事業化できないというものを掘り下げることが投資のロスとなる。それよりも興味があるものをピックアップし、対話を深め、後日マッチングの具体的な作業に入ることの方が効率的であり、事実その効率性をもとに対話会を行ったため、36のという数多くの対話材料を提供することが出来た。課題としては、医療特有の言い回しや細かい点を分かりやすく説明する困難さが残り、その難解さから対話が壁に当たり先に進まない点が見受けられた。この点はあまりにも医学的に専門性が高く、ファシリテーターの力量を超えていた（ファシリテーターの力量ではなく、より明確な説明法の構築が必要と感じた）。しかしながら、この壁に当たる前に、対話の方向性を修正しておく必要があったという課題があった。

<ワークショップの検証とアウトプット>

本ワークショップの着眼点は狙い通りであり、企業人と医療従事者が出会える場を提供することができた。具体的には、事業化の申し入れがあり、対話会としては成功したと言える。これは、病院の敷地内で開催したため、医療従事者が手軽に会場に足を運べる点、開催時間を遅めに設定したことで診療終了後の医療従事者でも参加できる点などのメリットもあった。また企業側からは、出展費用がないことと、医療従事者と出会える、他診療科の現状を対話を通じて知ることができ、そこから新しいイノベーション創出の種を見つけることができたなどの意見が多数寄せられた。これらの起因する点はやはり、「医療分野は仕切りが高く、これを取り払うことにより新しい知見が得られる」という仮説の狙い通りだったと考える。

フィードバック会での課題としては、診療科に偏りがあること、もっと数多くの医療従事者の参加を促すことが必要だったと考える。また一般向けのセッションも開催したが、「一般の人が抱える医療への要望検討会」という対話会をもとに、医療従事者と企業がイノベーション創出を練るという試みもあったと考える。これは今後の課題として、本年度も岡山大学自主経費で開催するかを含めて検討することとした。

第5回

<ワークショップの概要>

テーマ:革新的新産業創出ワークショップ リチウムイオン電池の社会実用化に迫るー

目的:岡山大学の研究力の強みである光技術分野を産業界の光技術でイノベーションシーズとなっている「リチウムイオン電池」と結びつけることで、研究ベースから実用化ベースへと押し出すための異分野ネットワークの構築を目的とした。

仮説・狙い:研究力の強みである点を実際にイノベーション創出というシーズに持ち込めるかどうかは検証していない。すぐにはイノベーション創出につながらなくとも異分野ネットワークを構築するための機会を設けることは必要不可欠であり、対話会を開催することとした。

手 法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は 59 人。

(企業人 50 人、教員 5 人、所属不明 4 人であった。今回のワークショップは、研究ベースから事業ベースへのシフトすることを目的とした異分野ネットワーク作りであるため、参加者の把握を実施した)

会 場：岡山ロイヤルホテル（岡山県岡山市北区）



対話する参加者ら（一部）



取り組みなどを紹介するファシリテーター

スケジュール：平成 26 年 3 月 24 日 13:00～17:10

ファシリテーター：藤原貴典、佐藤法仁（岡山大学）

ファシリテーターを 2 人配置した。藤原貴典は、岡山大学の産学官融合センター長を務め、当該分野の広い知見を有している。佐藤法仁は本事業の事業実施責任者として本事業の数多くのファシリテーターを務めるとともに、本ワークショップのために北海道大学で類似した電力革命のシンポジウムに参加するなど、広く情報収集を進め、知見を広めているために適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：今回は企業人が多いことが事前に把握できていたため、当初の狙い通り、事業化ベースへと結びつくように、より社会実装に近い形で進めた。ファシリテーターの運用がうまく行き、ワークショップ自体の流れはよかったが、企業人が多いことから対話からより具体的な対話へと掘り下げられ、時間を超過するに至った。対話の時間を区切る、あるいは落とすどころを見つけて切り上げるということもできるが、そのタイミングを逸すると、事業化ベースの対話が壊れてしまう可能性があるのではないかと考える点もあった。この点、本事業全体においても共通の課題だと認識した。

<ワークショップの検証とアウトプット>

本ワークショップの着眼点は事業化ベースへの対話ということだったが、事後アンケートでは、実際に事業化ベースまでには至らず、逆に「引き続きこのようなワークショップを開催してほしい」との声が数多く認められた。この点、狙いを定め間違えた点であり、事を急いだことに起因すると推測される。改善するために、本

年度も岡山大学自主経費で継続することを検討している。その際は、前述の課題として残った、対話の落としどころを検証する必要性もある。

なお、いままでワークショップには事前登録が不要で、自由に参加・退出できていた形式を取って来たため、今回のような事前参加型を窮屈に感じる参加者もいた。もしかすると自由な対話を促進するのは自由な参加形式かもしれないと感じる点であった。

第6回

<ワークショップの概要>

テーマ：異分野融合による産学官イノベーション国際ワークショップ

目的：本事業と全体総括の第一ステップとすべく、全ワークショップの総括ならびに異分野かつ国内外の第一線で活躍している人材を招聘し、話題提供することで見落とししている部分を補完することを目的とした。

(第一ステップとした理由：市場調査等が予定していた以上に長期化したため、これら調査をフィードバックするワークショップが本事業期間内で実施できなかったため、第一ステップとした。第二ステップは、前述のフィードバックを含めて、本事業で得た様々な知見を集約し、新たなイノベーション創出につながる提言をまとめる予定である(本年度5月頃に開催予定で調整中))。

仮説・狙い：イノベーション創出は大学単体では不可能であり、産学官連携などの異分野融合が必要である。そのため、全体総括では、国内外の主な分野からの対話材料を行うことで、真に社会実装化できるイノベーションシーズを見極められるのではないかと仮説を立てた。

手法：岡山大学式フューチャーセッション

参加者の状況：参加者は約100人。

(企業人約30人、学生が約10人、教員約20人、医療従事者約10人、事務職員約20人、一般約10人)

会場：岡山大学津島キャンパス(岡山県岡山市北区)



科学技術政策からイノベーション創出について対話材料を提供する文部科学省の担当者



海外の事例を挙げて対話する海外からの参加者ら

スケジュール：平成26年3月27日9:00~18:00、28日10:00~12:00

ファシリテーター：佐藤法仁、狩野光伸、宇根山絵美（岡山大学）

本ワークショップでは、ファシリテーターを3人配置した。これは、本ワークショップが「国際ワークショップ」であるため、ある程度海外からの参加者へファシリテーターが張りつき方向性を示すことが必要ある点や、異分野という多岐に渡る点から、多様な見識を持つ人材を登用すべきだと事前打ち合わせから議論となり、結果この3人がファシリテーターとして適任であると考えた。

ファシリテーションの実施状況：はじめに、本事業実施責任者の佐藤法仁が導入の話題提供を行った。具体的には、これまでにワークショップの説明である。次に順次、話題提供者が登壇し、対話材料を提供した。今回、中央官庁、企業、自治体、海外と括りを明確にし、それぞれの対話材料を行うことで、例えば中央官庁からの話題提供時には気がつかなかった話題が、企業からの話題提供時に気がついたり、さまざまな分野の話題提供を受けることで、参加者の頭の中で多角的な物の見方と対話のやり方が繰り広げられた感があった。実際、参加者らの意見も同様であった。課題としては、やはり日本人参加者と海外からの参加者との言葉の壁であった。ファシリテーターが通訳を行ったが、参加していた一般人の方には理解が難しい方がおられた。国際ワークショップを行う際の言語の壁をどのように取り払い、対話を促進するのかという点は大きな課題だと感じた。

<ワークショップの検証とアウトプット>

光技術と生命科学の両分野の融合を目指し、国内外と異分野的視点を持って対話する試みははじめてであった。いままでのワークショップで具体的に出てきたイノベーション創出へのシーズを今回のワークショップに当てはめると、政策的に課題があること、例えば国内外の薬事法の相違点やスピード感などの具体的課題や企業側から見ても両分野はわが国が世界で戦える分野であるという認識に至るなど、実にさまざまな対話成果が出された。その意味で、見落としている部分を補完することを目的とした本ワークショップの狙いは当たっていたと言える。また、海外からの参加者もあったためか、研究広報戦略ワークショップを核としてまとめられた「物事をわかりやすく伝える秀逸な能力」という点が非常に重要となっていたことも改めて感じた。

これらの点から、光技術と生命科学の両分野の融合から生まれる創薬、植物感染制御への応用などの具体例は、今後も補完すべき点が多く、それをきちんと埋めることで、真に社会実装化できるイノベーションシーズとなるのではないかという参加者らの対話から導き出された。

3 事業実施により得られた知見・課題等

(1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等

得られた成果と効果

- ・ファシリテーターの能力の向上

いままでは、一大学内で行われてきたワークショップが多かったが、本事業では産学官、異分野、国内外など、非常に多彩なシチュエーションでのワークショップを開催したため、ファシリテーターの能力の向上は、本学で行う通常のワークショップの質が目に見えて効果的になった点から言及できる点であると思われた。

- ・経済界との密な連携

いままでまったく関係を持っていなかった訳ではないが、経済界との密な取り組みはさほどなかった。しかし、本事業での連携により密となり、互いを知るよい機会となった。また単に知る機会だけに留まらず、今後も光技術と生命科学の両分野の融合や異分野ネットワークの構築からイノベーション創出などを目指すことで、地域の活性化を図ることなどを目的に、岡山大学と一般社団法人岡山経済同友会とで産学官連携の包括協定を締結することとなった点は、今後も施策からも非常に大きな成果である(平成26年4月24日締結予定)。これはさまざまなワークショップでの対話を通して、「岡山からイノベーション創出を」という機運が芽生え始めた点にあるのではないかと思われた。

- ・具体的なシーズ・ニーズのマッチングと共同研究、事業化への検討

前述した通り、病院の医療現場からの開発ニーズ対話会などで具体的な事業化が進められ点や、国内外調査や視察を踏まえた、より社会実装に即した共同研究、事業化の案件が本事業から生まれた。これも対話によって、知り得なかったイノベーション創出の種を見つけれられた点にあると考える。また、光技術分野と生命科学分野、研究広報戦略など、毎回のワークショップにおいて、具体的なテーマを設けることで、参加者が対話の的を絞りやすくてきたことに起因するのではないかと思われた。

- ・組織の変化

組織の中には「対話」で何かかわるのかという疑念の声があったことも事実である。しかしながら前述の成果が出るにつれて、その疑念の声は払拭された。組織の変化が包括提携や共同研究など、イノベーション創出を目指すポジティブ路線に向かわせているのではないかと考える。また、岡山大学は自主財源でURAを運用しており、他大学・機関とは異なる独自性あるURA制度を実施している。既存の大学組織に今までなかったURAなる組織を作ることはさまざまな影響を及ぼすが、本事業の運営とその成果から組織内でのURAに対する認知度が高まり、引いてはそれが大学改革推進、産学官連携の加速となるのではないかと思われた。

得られた問題点と課題

- ・一般市民が参加しにくい

前述した通り、具体的なテーマに絞ったワークショップが多かったため、テーマが医療や放射光などある程度の専門性のうえに成り立っているものは、一般市民の方はワークショップに参加しにくいと当初から予測していたが、実際に一般市民の方の参加が少なかったし、そのような意見も出た。ワークショップの事前会議やフィードバ

ック会でも、事業期間内で成果が出る成功事例のワークショップとそのファシリテーション技術を得ることが重要なのか、それとも漠然としたテーマのもと誰もが参加して対話する方がよいのかと言う議論は盛んに行われた。結局、本事業期間内で意見をまとめきれずに終わってしまった。

- ・ワークショップの自由度

いままで実施してきた「岡山大学式フューチャーセッション」は、事前登録と参加費不要とし、誰でも議論に自由に参加し、また自由に途中で抜けられる縛りのないセッションであり、ファシリテーターが将来につがる提案が導き出せるようにある程度方向性を決めて対話方式であった。そのため、参加者の性別、年齢、属性にはワークショップ開催中は気にせず、共同研究などの具体的な成果が出た時のみ、その当事者の属性を把握している。本事業でもそのようにしたが、「リチウムイオン電池」の時だけ、あえて事前参加と対話への参加を設定した。ワークショップ自体はそれなりに知見が得られたが、参加者からワークショップへの自由度の声があったのも事実である。いままで行って来た形式を考える良い点にはなったが、果たしてどのような形式がより良いのかという議論までには至らなかった。これは、そこまで気がまわらなかったことに起因すると思われる。

- ・スケジュール管理の失敗

3つの事業を行うことで、さまざまな知見を得られたことは良いことだが、前述したように事業実施期間内で予定していたワークショップをすべて終わらせることが出来なかった。これは、本事業に対応できる人員とその人員の日常業務とのバランスを見誤ったことに起因すると思われる。ただ、産官学市場調査において、産官学連携などを所管する人員数の現状と、その業務負荷の増加が認められていたため、根本的な問題は大学運営や科学技術政策にもあるのではないかと感じる点がある。なお、残りのワークショップ、「海外研究動向と市場調査を踏まえた産学官連携ワークショップ(仮)」は、自主経費で開催する。

(2) 今後の活動への展望

- ・まず、残りのワークショップを開催し、取りまとめを行う。具体的には提言書とし、本事業ブログに掲載する予定である。
- ・事業化、共同研究を進めようとしている案件のフォローアップを実施。実際に事業化、共同研究に至った際には、本事業でのワークショップが如何に起因したかを、より具体的にまとめ、成功事例として今後も用いる。
- ・本事業の成果のひとつである経済界との包括提携後、この連携関係をさらに強化し、イノベーション創出につながるための施策、人的ネットワーク、資金などのあり方について協議していきたい。
- ・本事業の報告書は公表される予定であるため、他実施期間の取り組みを精査し、類似の失敗や課題を抱えた機関とは是非連携を構築し、問題解決に当たりたいと考える。また成功事例においても、同様に聴き取り調査や共同ワークショップの企画・立案などを実施したいと考える。

(本報告者をご覧いただいている他機関の方々からのお問い合わせ等を歓迎します)

4 その他

- どのようなツールが開発されるのか楽しみである。実際に体験することで、どのような効果を得られるのかも含めて期待したい。
またこのようなツールは、「興味ある人」にとっては参加のハードルが低いですが、そのような人は、もしかすると少ないのかもしれない。「興味ない人」に対して如何にイノベーション対話ツールを手にしてもらうのかという点は注目したいと思う。これは、本事業での参加者へ集めにもつながる点だと思う。
- 本事業は、年単位あるいは複数年で実施しても良い気がした。